

五月のテーマ

実践こそ倫理



え・城谷俊也

実践への壁を 乗り越える

あ

る研修会で講師役を務めた経営者は、同業者を目の前にして、自社の発展の秘訣を詳細に語りました。

話を聞いていた友人が、「そんなことまで話して大丈夫ですか？」と尋ねると、その経営者は「実行に移し、継続できる人は一割にも満たないですよ」と答えたそうです。良い成果が得られるとわかってはいても、実行に移せない人のほうが多いというわけです。

倫理法人会で純粋倫理を学んでいる人は、実践の重要性をよく理解していることでしょう。経営者モニタリングセミナーなどで様々な人の体験を聞けば聞くほど、「やってみなければわからない」とわかるものです。ですが、良い話を聞いた人が皆、実践するかというと、決してそうではありません。

実践実行を阻む壁は、何なのでしょうか。一つは、これまでの「習慣」です。馴染んでいる習慣を変えることは、誰にとっても大変なことです。へこれまで通りでいいや」と、習慣を壁にしてしまうケ

ースはよくあります。

また、「実践したほうがいい」と頭では理解していても、本音では「そんなことはしたくない」と思っている場合もあります。そこには、恥ずかしいとか、面倒くさいといった思いが存在しています。これは「心」のクセが実践を阻む壁になっているといえるでしょう。

さらには、苦難や自己の課題に対してアドバイスをもらっても、自身の「経験」に照らし合わせて納得できなければ実践できない、ということもあるでしょう。経験というかけがえのない財産が、時に行動を躊躇させる壁となってしまうこともあるのです。

*

純粋倫理の実践体験には、一般的な常識だけでは理解しきれない事例が多くあります。

例えば、社員が顧客を抱えたままライバル会社に転職してしまうといった問題を抱えていた経営者が、妻の話に真心から耳を傾ける実践を重ねて社員の定着率が良くなり、その後、大いに発展したと

いう事例があります。

また、大病を患い、治療を続けたものの、なかなか状況が改善しない中で、社内の整理整頓の実践に乗り出し、不要なものを徹底して処分した結果、病状が劇的に改善したという経営者もいます。

妻の話を聞くことが、社員の定着率とどのように関連するのか。社内での「捨てる」実践が、なぜ病状の改善へと結びついたのか。こうした事例は、常識的には理解しにくいことでしょう。

しかし、そもそも苦難とは、それまでの人生で培ってきた知識や経験では乗り越えられないから苦難となっているという側面があるのではないのでしょうか。ならば、これまでの常識はいったん脇に置くことが「経験の壁」を打破することにつながるはずですよ。

実践実行を阻む「習慣の壁」「心の壁」「経験の壁」は、どれも強敵です。これらを乗り越えて本当に実践する時には、何も考えず、ただ素直に「やろう！」と決心してやる以外にはないのです。